

◎市指定文化財・真念庵伝蔵「紙本著高野大師行状図画」

調査で(一般財団法人)北國総合研究所が来市

一般財団法人・北國研究所の研究者の皆さんが土佐清水市に来市され、真念庵に伝わる市指定文化財「紙本著高野大師行状図画(全10巻)」を中央公民館会議室にて調査のため閲覧・撮影しました。

今回の調査目的は、長谷川等伯(1539-1610)とその門下に関わる研究です。この図画は、狩野孫右衛門正末・長谷川左近輝敏・中村南証ら三人の絵師によって描かれ、今回は等伯門下である長谷川左近輝敏の描いた部分を中心に調査が実施されました。

長谷川等伯は、豊臣秀吉や千利休にその才を認められ、絵師として重用されました。当時、画壇のトップにあったのは狩野派の絵師グループでした。等伯の存在は彼らの地位を脅かすほどであったと評価されています。

その弟子筋にあたる長谷川左近輝敏が「紙本著高野大師行状図画」を描き、市野瀬地区に所在する真念庵に伝えられていること自体、等伯と土佐清水市との不思議な縁を感じています。今回の調査により奥書の落款から見た結果、長谷川左近輝敏が等伯の弟子筋にあたる重要人物であったことは間違いのないようです。

この真念庵伝蔵「紙本著高野大師行状図画」は、弘法大師生涯の仏堂修行を絵図と説明文で著し、絵本のような仏画となっています。今後、生涯学習課としても中央公民館や図書館で市民向けに見学会を行うことも必要であると考えます。





↑北國研究所の調査・閲覧撮影

「市史執筆のブレイクタイム(11)」

戊辰戦争中に発生した堺事件

幕末から明治維新にかけて、欧米列強国が日本に来航し、その植民地化を図った。そのような情勢の中、外国人との衝突事件が度々発生している。万延元年～文久二年（1860～1862）に米通訳官ヒュースケン暗殺事件①、生麦事件②、英国公使館焼き打ち事件③とそれは立て続けに発生した。

大政奉還後、明治政府が最初に対応した外国人との衝突事件の一つが堺事件である。この年、慶応四年（1868）1月に神戸事件④、2月に堺事件とパークス英国公使襲撃事件⑤があり、外国人とのトラブルが短期間に集中して発生している。日本は、鎖国が終わり、欧米を目標にアジアの独立国家としていち早く近代化を進めていかなければならない事情があった。欧米と通商条約を無理やり締結させられ、鎖国のひとときの眠りから覚め、世界動向の厳しさを思い知らされたからである。

具体的には、インドや中国などのアジアの大国があたかも大人が幼い子どもの手を掴むように、英仏などに侵略されてきた現実を敏感に注視してきた。先進技術を習得し、富国強兵の国家を建設するためには、欧米との交流が不可避である。一方、欧米の方もアジアの重要な植民地候補の一つとして日本を捉え、列強間の主導権の渦中にあり、互いに腹の内を探り合っている状況にあった。外国人との衝突事件が頻発した慶応四年（1868）は、戊辰戦争の丁度真ただ中であつた。十分な取り調べも、検証もないままに、半ば外圧に屈した形でほぼすべての事件の処断が下されている。この不手際が、未だに歴史的視点で議論を呼び、腑に落ちず、陰鬱な気持ちをもたらす。将来的に事件の時代背景・史実・状況証拠を丁寧に突き合わせしながら、今後、事件について整理・検証していくことが必要ではないだろうか。

堺事件は、慶応四年（1868）2月15日の15時頃発生している。事件の2ヶ月前、米国海軍提督を含む数名が溺死した。このため、仏国海軍の上官は、事件当日、天保山周辺の大坂湾海底地形の測量を水兵たちに命じた。測量がそれほどの人数を要しないことから、非番となった若い水兵が堺の街に繰り出し、街中にて喧騒と徘徊した。兵隊で普段から規律ある生活を強いられた若者にとって日頃の鬱積した感情があつたことは容易に想像できる。堺の街人は、見慣れないテンションの高い外国人の羽目を外した行動に一種の不安や恐怖を感じたに違いない。

丁度、運悪く堺一帯の治安維持の任を土佐藩警備隊が割り当てられていた。堺の街人たちは、一連の騒ぎをそこに通報してきた。六番隊警備隊長・箕浦元章、八番隊警備隊長・西村氏などが対応し、この若い水夫たちに接触、身振り手振りで帰艦を諭すも言葉の壁があり、意味がまったく通じない。そこで力づく帰艦するため藩兵たちは水兵らを捕縛しようと揉み合った。個々の高ぶつた感情がぶつかり合う。市街にいた見物人たちの目も気になり、双方の集団のプライドも事の沈静化を邪魔したのだから。

う。特に、仏国水兵たちは、そのほとんどが 20 代の若者であった。土佐藩の隊旗を奪う無礼な行為をはたらく水兵もいた。事ここに至って、藩兵たちの堪忍袋の緒が切れた。やむなく藩兵たちは発砲した。市街で銃撃戦が発生し、結果、20 歳から 28 歳までの若い仏国水兵たち 11 名が死亡する事態に至った（うち 2 名は翌日死亡）。藩兵側にも相当な負傷者がいたと思われるが詳しい資料が見当たらず詳細は不明である。

京都でこの報を受けた土佐藩前藩主・山内容堂は、関係隊員を適正に処罰すると英国公使館職員を通じて仏国公使に連絡、水面下での交渉を展開した。しかし、事件は国家間の国際問題にまで発展し、政府側代表と仏国側代表の交渉に移った。短期間での度重なる示談の結果、警備隊長以下 20 人の隊士の切腹で事件処理することが決定した。隊長を含む 4 人は、すぐに切腹の処分が決まり、残りの 16 名は隊員の中からくじ引きで決められることになった。くじ引きは、土佐稲荷神社（大阪市西区に所在）で行われることになった。それにしてもくじ引きで処刑が決まるとは随分と乱暴な話である。人間の生命を何と考えているのか。事件発生から、わずか 8 日後のことであった。あまりにも早急すぎる。この裁定を聞き、浅野内匠頭・吉良上野介の江戸城中刃傷事件・赤穂事件を思い起こすのは私だけだろうか。

2 月 23 日、堺・妙国寺にて処刑が執行された。仏国側代表としてアベル・デュプティ艦長が立ち会った。しかし、あまりの凄惨さに仏国側水兵の死者数と同じ 11 名の切腹で、艦長は処刑の中止を要請した。この措置について仏国公使ロッシュも事後承認している。この間、処刑を寸前のところで免れた橋詰愛平ら 9 名は、一時的に熊本や広島藩にお預けとなったが、最終的には土佐国幡多郡入田村（現在の四万十市入田）に所払いとなり、その後の明治政府の恩赦により在所に帰郷した。死刑になった 11 名の隊員とそれを免れた 5 名の隊員の命運には雲泥の差があった。切腹した隊員は二度とその家族に生きて会うことはできなかつたのである。

事件後、切腹した土佐藩兵 11 人は、妙国寺内で手厚く葬られ、死亡した仏国人水夫も神戸市にある外国人墓地に供養碑が建立されている。

註

- ①安政三年（1856）から米国領事ハリスの秘書兼通訳を行っていたオランダ人ヒュースケンが、万延元年（1861）12 月 4 日、プロイセン王国使節宿舎（港区）からの帰途、芝薪河岸で攘夷派の伊牟田尚平・樋渡八兵衛ら薩摩藩士に襲撃された事件である。その翌日ヒュースケンは死去した。
- ②文久二年（1862）2 月 21 日、武蔵国橘樹郡生麦村（横浜市鶴見区生麦）で薩摩藩主の父・島津久光（1817—1887）の行列と英国商人ら一行がすれ違う際に発生したトラブルにより、行列にいた警護の薩摩藩士に英国人一行が殺傷（1 人死亡・2 人重傷）された事件である。この事件がきっかけとなり、翌年に薩英戦争が起って薩摩藩は完敗した。これにより、薩摩藩は現状で攘夷が不可能であることを身をもって実感するきっかけとなった。
- ③文久二年（1863）12 月 12 日に、騎兵隊高杉晋作らの計画で実行された事件である。当時、江戸品川の御殿山で建設中であつた英国公使館を井上聞多（馨）・伊藤俊輔（博文）らが焼玉を用いて放火したもの。優柔不断の幕府に攘夷を決断させる目的で計画・実行された。
- ④慶応四年（1868）1 月 11 日、神戸三宮神社前の外国人居留予定地で行進中の備前藩兵の隊列を仏国人水兵が横切った。これをきっかけに岡山藩兵による銃撃が行われ、仏国水兵らを負傷させた。また、近くで視察中だつた欧米公使らにも水平射撃が加えられた。この事件のため、外国軍が一時、神戸中心部を占拠する事態となった。事を收拾するため藩兵部隊の責任者・滝善三郎を切腹させ、その事件の幕引きを行った。
- ⑤慶応四年（1868）1 月 11 日、英国公使パークスが明治天皇に拝謁するため、宿舎の浄土宗総本山知恩院（京都市東山区林下町）を出て、京都御所に向かう途上、移動していたときに二人組の刺客に襲われた事件である。犯人の一人は護衛に切り殺され、今一人は捕縛され、後日斬首されている。